

名詞述語文「AはBだ」の種類と使用比率

佐藤 雄一

0. はじめに

名詞述語文の性質や分類については、多くの先行研究がみられるが、コーパスを用いたものは、管見では今田 (2011)¹のみである。

「AはBだ」という「は」を用いた名詞述語文において、どのような種類（主語と述語の関係にもとづいた分類）の文がどのような割合で用いられているのか、先行研究での文の分類が使用頻度と照らし合わせてどのような問題点を含んでいるのかを考察する。

1. 先行研究

1—1 三上 (1953)、南 (1993)

名詞述語文について三上 (1953) は、「少なくとも次の三通りの用法を区別しなければならぬ (pp43-44)」と述べ、「指定」「措定」「端折り」に分けている²。

措定は「包摂判断」を表すのに対し、指定は包摂判断ではなく「identification」（一致認定）にすぎず、「概念の内容に立入って何かを教えるのではなく、ただ違った外形を持っている二つの単語間の一致を認定するだけのものである (p138)」と述べている³。

措定と指定という名詞述語文の性質の違いを指摘した点は、その後の名詞述語文の研究に大きな影響を与えるが、それ以外の名詞述語文についての分析は十分に行われていない。

南 (1993) は、述部の中心をなす品詞の違いに基づいて、日本語の文を「動詞述語文」「形容詞・形容動詞述語文」「名詞述語文」「疑似名詞述語文」の4種類に分類している。

名詞述語文は、1) 2)⁴の例のように「一致の関係」を表すものが典型的なものであるとし、述部が名詞であっても、「一致の関係」とは言えないような3)~6) のような文を「疑似名詞述語文」として、「名詞述語文」とは区別している。疑似名詞述語文には2種類あり、3) 4) を「疑似名詞述語文1」、5) 6) のようないわゆる「ウナギ文」を「疑似名詞述語文2」としている。

1) 森君は研究生だ。

2) あの家は木村さんのお宅です。

- 3) 僕は12日に神戸から船で出発だ。
- 4) 水道は現在修理中です。
- 5) 私はカレーライスです。
- 6) りかちゃんはバイオリンで、じゅんこちゃんはピアノだ。

南(1993)は三上(1953)が、「端折り文」として一括していたものをさらに下位分類している。

1-3 菊地(1995)

菊地(1995)は、「は」が用いられる構文全体を概観したうえで、名詞述語文を次のように分類している。

(1) コピュラ文

- 7) Aさんは学生だ。
- 8) 犬は動物だ。
- 9) 東京は日本の首都だ。

コピュラ文は、論理的に $X \in Y$ (XがYの構成要素)、 $X \subset Y$ (XがYの下位集合)、 $X = Y$ となるものである。これらの変種として、「学生はAさんです」(「この中で学生さんはどなたですか」という問いに対する答え)、「君の幸せは僕の幸せだ」(事実上の条件表現)、「子供は子供だ」(自同表現)のようなものもコピュラ文に含まれる。

(2) 〈Y = 場所/時間/数量〉の「XはYだ」文

- 10) 郵便局は駅前です。
- 11) 会議は三時です。
- 12) 子供は二人です。

これらの文は、コピュラ文とは区別すべきだが、文脈の助けがなくても意味がとれる点でウナギ文とも異なると述べている。

(3) 〈選び出し〉の「XはYだ」文

- 13) 魚は鯛だ
- 14) 男は度胸だ

このタイプの文は、何らかの意味でXがYを含み、Xの中からYを選び出すものである。このタイプの文も、文脈の助けがなくても成り立つ点で、ウナギ文と異なる。

(4) ウナギ文

「私は鰻だ」のように文脈の助けがなければ、適切な意味が理解されないタイプの文で、「〈文脈依存〉の「XはYだ」文とも呼ぶべきだろう (p60)」と述べている。

さらに、「分裂文」もひとつの類型としているが、本稿では分裂文については考察の対象としないため、深くは立ち入らないことにする。

三上(1953)以降、措定文、指定文(南の名詞述語文、菊地のコピュラ文)以外の名詞

述語文の類型が、より緻密に分析されていく流れがみられる。

1-4 丹羽 (2005)

丹羽 (2005) は、形容詞述語文への連続性も視野に入れながら、ウナギ文も含めた名詞述語文全体の類型化を行っている。そして以下のように、名詞述語文は、典型的なコンピュータ文 (帰属文)、性質文、ウナギ文 (逸脱的性質文) に分けられている。

帰属文

同等関係 (AとBが固体同士または集合同士の関係で、指定関係でも帰属関係でもない)

15) 松平竹千代は、後の徳川家康だ。

16) H2Oは水だ。

指定関係 (AとBが集合と要素の関係)

17) この会社の社長は山田氏だ。

18) 彼が買ったものは、りんごとみかんとバナナだ。

帰属関係 (AとBが要素と集合の関係)⁵

19) 山田氏はこの会社の社長だ。(要素がひとつ=同一関係)

20) 山田氏は会社の社長だ。(集合の要素が複数想定される=帰属関係)

性質文 「AはBという性質を持つ」

21) 太郎は気長だ。

22) 太郎は気長な性格だ。

ウナギ文 「AはSがBだ」の「S」の部分文脈に依存しているもの⁶

23) 僕は7時です。

(「散歩の時間」「起床時間」「朝食の時間」などが文脈として考えられる)

24) 彼はソニーと松下だ。

(「就職希望の会社」「主な取引先」などが文脈として考えられる)

25) 彼の家は神戸だ。

26) 夜のニュースは7時と9時だ。

丹羽 (2005) は、逸脱的性質文と名付けはしているが、ウナギ文を性質文の一種と捉えている。したがって、名詞述語文は「帰属文」と「性質文」に大きく分けられることになる。

三上 (1953) は措定にも指定にも分類できないものを「端折り」とし、南 (1993) は「擬似名詞述語文」とした。また、菊地 (1995) はコンピュータ文とは区別して、「〈Y=場所/時間/数量〉の『XはYだ』文」、「ウナギ文」等を設定している。

このように典型的な名詞述語文ではないもの (「AはBだ」における「A」と「B」が包摂関係や同一関係にないもの) を例外的な扱いをするのではなく、典型的な名詞述語文と

の関連性の中で捉えようとする観点は、大きな意味を持つ。それは、名詞述語文だけでなく、形容詞述語文や動詞述語文と関わりの中で名詞述語文を捉えることにもつながっているからである。

次に、文のタイプではなく、名詞述語文における主語と述語の意味的關係について考察した高橋（1984）について概観する。

1-5 高橋（1984）

高橋（1984）は、名詞述語文における主語と述語の意味的關係を、動作づけ、状態づけ、性格づけ、同一づけの4つに分類したうえで、性格づけと同一づけはさらに細分類している。

(1) 動作づけ（述語が主語のさしめすものごとの運動をさしめしているもの）

- 27) われわれもいよいよあす出発だ。
- 28) 今夜のことはだれにも絶対に秘密よ。

(2) 状態づけ

- 29) 震災の時、彼女は一年生だった。
- 30) だから君はいまちゅうちよすべき時じゃない。

(3) 性格づけ

性質づけ（内包）

- 31) 彼女は陽性だ。 32) 彼女は陽気な性質だ。
- 33) 座敷は六畳だ。 34) 座敷は六畳の広さだ。（量・程度づけ）
- 35) 家はあの下だ。 36) 出入り口は一ヶ所だ。（存在づけ）
- 37) AとBは正反対だ。 38) 彼らはいいい友達だ。（関係づけ）

種類づけ（外延）

- 39) さそりは虫よ。（上位概念で性格づける類づけ）
- 40) 太郎はよい人間だ。（何らかの内包で制限された上位概念で性格づける種づけ）

別種類づけ（本来のカテゴリーとは別の系列のところに位置づける）

- 41) 私は畜生だった。 42) 彼は文壇の電信局だ。

(4) 同一づけ（主語と述語が同一のものを指し示している）

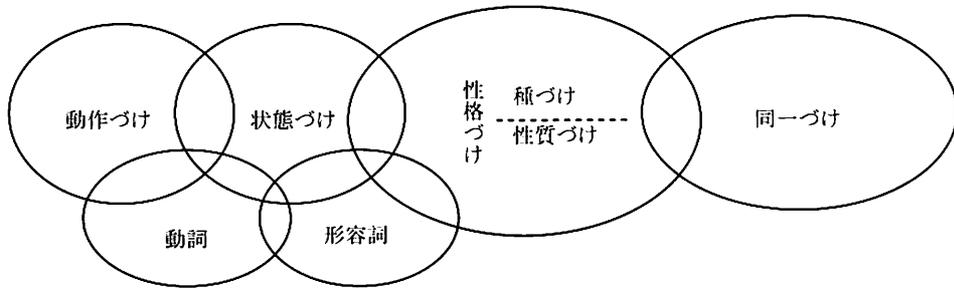
- 43) これは、きのうのきっぷだ。（現象形態がちがう）
- 44) これはライラックだ。（一つの現象形態にあるもの）
- 45) パンをくったのは、おれだ。（ひっくりかえし文）
- 46) 石本の話というのは、健作の結婚のことだ。（内容とわくぐみ）
- 47) 電気を消すのが私のしごとだ。（できごとや動作とその概念化）
- 48) シメキとは情婦の意味だ。（意味するものとされるもの）

以上のように分類したうえで、「名詞述語文では、同一づけの關係をとるものがもっと

も多く、種類づけがそれにつく。性質づけや状態づけはかなりへって、動作づけはほとんどない (p22)」と述べている。

高橋 (1984) の分類は、主語と述語の意味関係に基づいたものであるため、連続的な部分がみられる。それぞれの連続性を市川 (1990) は、次のように示している。

図1 名詞述語文の意味関係の連続性



2 本稿の立場

本稿では、高橋 (1984) の意味関係の分類をもとに、それらを文の性質として位置づける丹羽 (2005) の枠組みを参考に、次のように名詞述語文を分類した。

表1 本稿での名詞述語文の分類

丹羽の分類 (文の種類)	高橋を参考にした分類 (主語・述語の意味関係)
帰属文 (同一関係)	同一づけ { 指定 ⁷ 数値 内容 とらえなおし 意味説明
帰属文 (帰属関係)	性格づけ { 種類
性質文	性格づけ { 別種 性質 量・程度 関係 存在 反復 状態づけ 動作づけ
逸脱的性質文	文脈依存

高橋 (1984) の「性格づけ」はコピュラ文か否かによって「帰属文」と「性質文」に分割した。さらに、丹羽 (2005) の逸脱的性質文に「状態づけ」と「動作づけ」を加え、形

容詞述語文や動詞述語文に近づいてはいるものの、これらも性質文の一種とすることにした。

この分類をもとに、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（以下BCCWJとする）を用いて、現代日本語の名詞述語文において、どのような性質の文が、どのような頻度で用いられているのかを明らかにする。また、これまでは典型的な名詞述語文や大きく逸脱した「ウナギ文」については多くの研究がなされているが、典型と逸脱の連続性やその中間的性質の文についての研究の必要性についても考察していく。

3 用例分析

3.1 用例収集の方法と対象

BCCWJを用いた名詞述語文の用例検索は、検索アプリケーション「中納言1.0.2」を使用し、短単位検索を以下の手順で行った。

キーを「品詞」「助詞」AND「書字出現形」「は」に設定し、前方共起（キーから1語）を「品詞」「名詞」に設定した。さらに、後方共起1（キーから1語）を「品詞」「名詞」に設定し、後方共起2（キーから2語）を「品詞」「助動詞」AND「語彙素」「だ」に設定した。後方共起の方は順次繰り返していき、後方共起1（キーから5語）、後方共起2（キーから6語）まで、検索を行った。検索対象はコアのみである。

その結果、「は」を用いた名詞述語文が726例得られた。検索の結果としては、述語が形容動詞であるものや、二つの名詞が主述関係となっていない用例も得られたが、これらは考察の対象から除外してある。

また、今回の検索方法では、すべての名詞述語文を拾い上げることは不可能で、「は」以外の助詞（たとえば「も」）を用いた名詞述語文や、新聞記事等に頻繁に使用される名詞止め（「だ」が省略されているもの）も用例として採集していない。

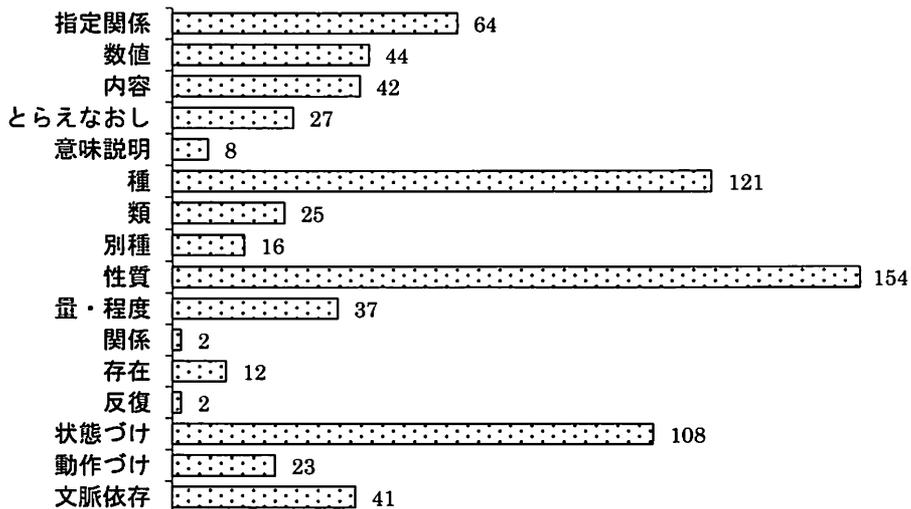
本稿の目的は、「は」を用いた名詞述語文の種類別の使用頻度の傾向を把握することであり、「も」を用いた名詞述語文やコンピュータを伴わない名詞止めの名詞述語文などについては、本稿での分析結果を踏まえたうえで、今後検討していくことにする。

3. 2 使用頻度

表2 文の種類と主語・述語の意味関係にもとづいた使用頻度

文の種類	主語・述語の意味関係	用例数	割合	
帰属文 (同一関係)	同一づけ 185例 (25.5%)	指定関係	64	8.8%
		数値	44	6.1%
		内容	42	5.8%
		とらえなおし	27	3.7%
		意味説明	8	1.1%
帰属文 (帰属関係)	性格づけ 146例 (20.1%)	種	121	16.7%
		類	25	3.4%
性質文	性格づけ 223例 (30.7%)	別種	16	2.2%
		性質	154	21.2%
		量・程度	37	5.1%
	性格づけ合計 369例 (50.8%)	関係	2	0.3%
		存在	12	1.7%
	状態づけ	108	14.9%	
	動作づけ	23	3.2%	
逸脱的性質文	文脈依存	41	5.6%	
合計		726	100.0%	

図2 主語・述語の意味関係にもとづいた使用頻度 (用例数)



全体的な傾向として、「性格づけ」の多さが目立つ。全体の51%が、「性格づけ」となっている。高橋 (1984) は「名詞述語文では、同一づけの関係をとるものももっとも多く、種類づけがそれにつぐ。性質づけや状態づけはかなりへって、動作づけはほとんどない (p22)」と述べているが、「同一づけ」「状態づけ」「動作づけ」と「種類づけ」「性質づけ」は、レベルが異なるため同列に比較することはできない。「同一づけ」がもっとも多いと

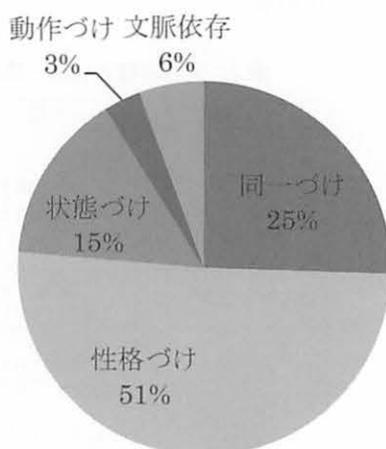
指摘しているが、「同一づけ」と同じレベル分類で比較するのであれば、コーパスを用いた今回の調査では「性格づけ」がもっとも多いことになる。これは本稿の考察対象が「AはBだ」形式の名詞述語文であることが大きく影響しており、「AがBだ」形式の名詞述語文まで含めて調査すれば、おのずと結果は異なってくるであろう。

また、高橋（1984）が「かなりへって」くと指摘している「状態づけ」に関しては、今回の調査結果から判断する

限り、決して少ない比率とは言えないだろう。これは3.7で考察する「体言締め」の形式をどのように判断したかによる違いではないかと考えるが、高橋（1984）は「体言締め」の形式については詳しく述べていないため、用例数に差が出た原因については明言できない。

次節以下で、それぞれの意味関係と文の性質について考察していくことにする。用例の（ ）内はBCCWJのサンプルIDである。

図3 主語・述語の意味関係にもとづく割合



3.3 同一づけ

「同一づけ」には、「指定関係」や「とらえなおし」が含まれる。述語名詞が数値を示すものや、主語名詞が枠組みを提示しその内容を述語名詞が示す「内容と枠組み」が一つの類型としてまとまった用例数を示している。

3.3.1 指定関係

「同一づけ」の中でもっとも用例が多いのは、指定関係（AとBが集合と要素の関係）であり、全体の8.8%、「同一づけ」の中で36.4%を占める。ここでいう指定関係は、述語名詞が主語名詞に該当する要素を示すものを指しており、なおかつ主語と述語の意味関係が、数値の提示、内容と枠組み、とらえなおし、意味説明という特徴的なグループとしてくれないものをひとつのグループとしてまとめたものである。

49) 中田家の新しい住人は、オスのシャムネコだった。(PB54_00027)

50) 企業にとって最も重要な資源は人的資源である。(PB13_00021)

51) 日本の「仮想敵国」といえば、ソ連であり、防衛の最前線は北海道だった。(PM31_00101)

3. 3. 2 述語名詞が数量を示すもの

次に、述語に数値が用いられる例は44例ある。これらの用例は菊地（1995）が「〈Y = 場所/時間/数量〉」としたものとも異なっている。菊地（1995）の用例はいずれも「郵便局」や「会議」「子供」が「いつ、どこに、どのくらい」存在するかを表現したものである。⁸

52) 郵便局は駅前です。(再掲)

53) 会議は三時です。(再掲)

54) 子供は二人です。(再掲)

「同一づけ」の中で用いられている数値は、以下のようなものである。

55) 情報通信サービスへの支出の家計支出に占める割合は3.8%である。
(OW6X_00068)

56) 同年における来日外国人による売春防止法違反の検挙件数は二百六十三件であった。(OW6X_00045)

57) 金利2.5%の二十年ローンで借りた場合、毎月の返済額は約十五万円だ。
(PB33_00046)

主語名詞は、「割合」「件数」「額」というように、述語で表される数値がどのような性質のものであるかを示している。この点で、52)～54)の「郵便局」や「会議」「子供」とは異なる。数量的な枠組み（数値の持つ性質）を表す名詞に対して、その具体的な数値が述語で示されるという形式が、このタイプの特徴である。「枠組みと具体的な数値」という関係は、次に述べる「内容と枠組み」とも関連している。

3. 3. 3 内容と枠組み

58) スズメの大きな特徴は、歩けないことです。(PB24_00012)

59) 美智子皇后は、『皇室の伝統は、祈りと継承です』と常々言われています。
(PM41_00070)

60) ロープ氏の最大使命は大統領の再選だ。(PN2e_00004)

これらは、いずれも主語名詞「特徴」「伝統」「指名」の内容が述語で示されている。また、これまで、名詞述語文の研究では用例として取り上げられていないが、コーパスを検索してみると、次のような用例がひとつの類型として観察される。内容と枠組みに分類した42例のうちの約半数の20例がこのタイプであった。

61) 支援費制度の基本的な仕組みは、以下のとおりである。(OW6X_00061)

62) それぞれの手続の概要は、次のとおりである。(OW6X_00008)

「仕組み」「概要」等の枠組みを示す名詞が主語として提示され、その内容については次の文（章）で詳しく述べられるという構造である。このようなタイプも「内容と枠組み」として、「同一づけ」に分類した。

3. 3. 4 とらえなおし

「同一づけ」の中で、高橋（1984）が「現象形態がことなる」とするものは、丹羽（2005）の「同等関係」に該当するものであり、「AはBだ」において「AとBが固体同士または集合同士の関係」にあるものである。今回の調査では27例あり、全体の3.7%であった。

63) 義則の長男は將軍足利義教を殺害した満祐で、奥方は佐々木道春の娘です。
(PB12_00008)

64) つまり復讐することは、復讐させることであることが分かる。(OY03_04233)

3. 3. 5 意味説明

「同一づけ」には、次のような「意味説明」のタイプもある。主語として提示された名詞の意味を述語名詞で説明するものである。

65) 九州のオゴはすべて娘のことである。(PB48_00016)

66) この語源も「ママ（飯）+こと（事）」で、ママは御飯なのです。(PB58_00012)
用例としては、8例で、全体の1.1%である。

3. 4 性格づけ

高橋（1984）が「性格づけ」と分類しているものは、多岐にわたっている。表1に示したように、丹羽の帰属文と性質文にまたがっている。「帰属関係」を示す文は「種類づけ」に該当し、性質文は「性質づけ」に該当する。

3. 4. 1 種類づけ

「種類づけ」は主語名詞をその上位概念である述語名詞で性格づけるものであり、主語名詞は述語名詞の要素となる。

67) 子育ては、楽しみや生きがいである (OW6X_00020)

68) メシは男性用語です。(PB58_00012)

67) 68) のように、修飾語を伴わずに上位概念を示す名詞のみで性格づけられるものを高橋（1984）は「類」とし、以下のように修飾語をともなった上位概念で性格づけられるものを「種」としているが、いずれの場合も主語名詞が述語名詞の要素になっているという点は変わらない。

69) カラスとは正反対に、スズメは可愛らしい鳥です。(PB24_00012)

70) インドは優しいだけの国ではない。(PB42_00003)

用例としては「類」25例に対し、「種」125例であり、「種」のほうが圧倒的に多い。また、主語名詞と述語名詞が要素と集合という関係ではないものの、「性格づけ」に含まれるタイプとして次のような用例がある。高橋（1984）は「別種」として「性格づけ」に分

類しているが、「要素と集合」という観点から分類している丹羽（2005）の立場からは、「性質文」に位置づけられるであろう。

71) 精神障害分野の不利益は高い壁である。(PB53_00081)

72) 人生はローリング・ストーンだ！(PB25_00063)

3. 4. 2 性質づけ

73) A子さんのマンションはオートロックだが、…(PN2c_00020)

74) お墓の下は、二畳敷ほどの玄室になっていた。玄室はむろん石造りで、…(PB39_00024)

「性質づけ」は具体的なものの性質だけでなく、次のような抽象的な事柄の性質を述べる場合もある。

75) 皇太子夫妻が孤立を深めていくことは望ましいことではない。(PM41_00070)

76) 圧制をもって支配することは仕方がないことである。(PB33_00018)

また、述語名詞が「量・程度」を表すものや「関係」を表すもの、「存在」を表すものなども性質づけに含まれる。

77) この日、関空で通関されたマツタケは三十五トンで、…(PN1d_00004)

78) その技術は世界最高レベルだという。(PM21_00320)

79) 二人はいいライバル関係だけど、年上の清原が松井に一目を置いているよね。(PM21_00189)

80) 母と佐倉は昔からの知り合いだったに相違ないと、…(PB29_00003)

81) その交差点は交番から見えるところです。(OC05_00330)

82) 複数の宿舎の貸与を受けている職員は三百八十八名です(PM41_00230)

さらに、統計などの説明文では、以下のように数値を示して増減を述べるタイプが見られる。これらも「性格づけ」の「量・程度」として位置づけることができるだろう。⁹

83) 「公的年金を中心に、貯蓄など自助努力を組み合わせる」とした人は四十一・七%で、9.3ポイント減少。(PN3c_00020)

84) 薬物を使用していた者の比率を見ると、使用していた者は十七・一%であり、前年よりも2.1ポイント低下している。(OW6X_00017)

3. 3. 2で述べたように、これらのタイプは「同一づけ」に見られる「数値」とは区別して考える。

「性格づけ」の用例は369例であり、全体の51%になる。また、丹羽（2005）の分類に従えば、帰属文は331例で、全体の46%ということになる。「AはBだ」形式の名詞述語文において、主語と述語の関係においては「性格づけ」が半数以上を占めるということである。

3. 5 状態づけ

85) 週末になれば営業カウンターはごった返した。(PN4g_00005)

86) 約束の開港日は、もう目前であった。(PM12_00011)

87) 県建設業協会は、村岡氏を推薦したが、内部は一枚岩ではなかった。
(PN1b_00018)

「状態づけ」に関して高橋(1984)は「あるモノゴトが、一定の時間(時点または持続時間)において、どんなありさまにあるかをさししめす関係である(p27)」としている。そして、「性格づけ」と「状態づけ」の相違点については「性格づけは、たいてい(状況語または文脈によって)時間軸上への位置づけを受けると、状態づけの関係を手に入れるとってよいだろう(p28)」と述べている。

このような時間軸とかかわる「状態づけ」に分類されるような名詞述語文について、丹羽(2005)がどのような位置づけを行なうかは明確に述べられていない。時間軸という観点を無視すれば、広い意味では性質文に振り分けられることになるのであろう。

また、「状態づけ」には、次の例のように述語名詞の修飾語を省いてしまうと主語名詞との意味関係が不自然になってしまう(「不満は勢いだ」「衣は歯ごたえで」)タイプの文がある。このタイプについては3.7で述べる。

89) ユーザーの不満は高まりそうな勢いだ。(PM15_00058)

90) キツネ色の衣はザックリと軽快な歯ごたえで、…(PM21_00320)

3. 6 動作づけ

91) デイズニーは朝8時開園です。(OC13_00523)

92 「働く」面は水曜日の掲載です。(PN5a_00005)

93) 2冊目のタイトルは決まりですね。(PM31_00275)

「動作づけ」には、91) 92) のようにサ変動詞の「スル」のかわりにコピュラを付けたものや、93) のように動詞の連用形を名詞化したものが用いられる。高橋(1984)が指摘しているように、「動作づけ」のタイプはそれほど多くなく、23例、3.2%にとどまっている。

本稿では、「状態づけ」と「動作づけ」を「性質文」に位置づけたが、これらは名詞述語文から形容詞述語文、動詞述語文へと連続していくものと考えられる。述語が名詞であるという理由で、性質文としているが、性質文の中でも周辺部(動詞文寄り)に位置づけられるものであろう。

3. 7 体言締め

角田(1996)は以下のような用例を挙げ、これらの文を「体言締め文」と呼んでいる。

94) 太郎は明日つくばに来る予定だ。

95) 太郎はどうしても東京へ行く気だ。

96) 太郎は元気な様子だ。

97) 太郎はいつも苦しい状況だ。

これらの文は、いずれも述部が「動詞／形容詞（・形容動詞）の連体形＋体言＋だ」という構造になっており、主語と述語の意味的な関係も典型的な名詞述語文とは異なる。述語名詞の修飾部を省略してしまうと、「太郎は予定だ」「太郎は気だ」「太郎は様子だ」「太郎は状況だ」となり、きわめて不自然な文になってしまう。

新屋（1989）も「述語名詞が主語をモノとして述定する名詞文ではない（p87）」名詞述語文として次のような例を挙げている。

98) これは完全な不意打ちだった。

99) 平岡は不在であった。

100) 川田君はすなおで朗らかな性格です。

101) 梓川は、この前の春の時とは少し異なった感じだった。

102) 平岡はあまりこの返事の冷淡なのに驚いた様子であった。

そして、100)～102) のように「連体部を必須とし、コンピュータを伴って文末に位置し、主語と同値または包含関係にない名詞を便宜上『文末名詞』、文末名詞を持つ文を『文末名詞文』（p87）」と呼んでいる。

角田（1996）、新屋（1989）ともに同じタイプの文について言及しているものであるが、本稿では「体言締め文」という語を用いることにする。

なお、98) 99) については、新屋（1989）は触れていないが、「体言締め文」とは文構造が異なるが、主語名詞と述語名詞の意味的關係からそれぞれ「性格づけ」と「状態づけ」に分類することができるだろう。

「体言締め文」という文の種類は、文の構造を考慮に入れた上での分類であるが、主語名詞と述語名詞の意味的關係から捉えると、その用例は「性格づけ」「状態づけ」に分類されることになる。

103) タルトの生地はもちもちした食感でほのかに甘味があり、…（PN3c_00017）

104) 人はやすきに流れるものである。（PB36_00006）

105) 市長は裁判で争う構えだ。（PN4a_00024）

106) 高速化と同時に値下げをしなければユーザーの不満は高まりそうな勢いだ。（PM15_00058）

103) 104) の述部は性質を示しており、「性格づけ」に分類される。また、105) 106) は「状態づけ」に分類される。

角田（1996）は「体言締め文」を「動詞／形容詞（・形容動詞）の連体形＋体言＋だ」という形式を持つものとしているが、さらに「名詞＋の＋体言＋だ」を付け加える必要がありそうである。

以下の用例のように、述語名詞を「名詞+の」で修飾するという例も少なからず存在するからである。これらは、いずれも「体言締め文」に分類されるべきものであろう。

107) 高齢の会長は車椅子の生活で、(PN2b_00010)

108) 現在函館はお祭りの最中なので、全路線二百円均一料金で利用できます。

(OY11_02253)

本稿では「体言締め文」を「性格づけ」あるいは「性態づけ」などに分類しているため、表2には「体言締め文」の用例・比率を示してはいないが、このタイプの文構造を持つ用例は99例みられ、全体の13.6%を占めている。「体言締め文」だけをみると「状態づけ」がもっとも多く46例、次いで「性質づけ」37例、「量・程度」が11例となっている。

3. 6 逸脱的性質文

109) 山田さんは学生です。

110) 山田さんはお子さんが学生です。

111) 山田さんは (お子さんが) 学生です。

112) 僕は (起床時間が) 7時です。

109) は何の文脈もなければ、「山田さん」が「学生である」という帰属文として理解されるが、111) の(お子さん)の部分が文脈上明らかな要素として省略された場合は、いわゆるウナギ文として解釈される。また、112) は文脈の助けがなければ主語名詞と述語名詞だけでは両者の関係が理解されない。文脈によって()内の部分が補われてはじめて、主語名詞と述語名詞の関係が明らかになる。そして、111) も112) も主語名詞「山田さん」「僕」という人間の一側面について述べた文であることは間違いない。したがって、主語名詞と述語名詞の関係は「性格づけ」ということになる。

丹羽(2005)は「ウナギ文と呼ばれるものは性質文の中で『非自立』のみが可能な場合(p13)」であると述べている。「非自立」ということは、文脈の助けがなければ、主語と述語の関係が正確に理解されないということである。

109)~112)の用例からもわかるように、ウナギ文か否かは連続的であり、文脈に依存しているか否かによって判断されるということになる。ただし、意味構造の理解として文脈に依存していても(したがってウナギ文であっても)、文脈から独立していても主語名詞の何らかの性質を表しているという点では区別する必要はないと考える。

113) うちは女の子なのでよくわからないのですが、(OC10_01209)

114) 自分は熊本県なので丸井というお店がわかりません。(OC09_00358)

115) やっぱり餃子は豚です！(OC08_02764)

116) 中古・再生住宅の販売は、なにより鮮度ですよ。(PB36_00006)

いずれも、文脈がなくても主語名詞と述語名詞の関係は推測できる。推測はできるが、それが適切かどうかは、やはり文脈から判断せざるを得ないであろう。次のような

用例は、文脈がなければ主語名詞と述語名詞の意味関係を類推するのも困難である。

117) うちは千五百万です。(OC03_00318)

118) 私がいる地域は1チャンですけどね (OC01_00486)

本稿では、113)～116)のように、文脈なしでも推測可能なものと117) 118)のように文脈がなければ意味関係の理解が困難なものをあわせて「逸脱的性質文」とした。これらのタイプは41例みられ、全体の5.6%であった。

4. まとめと今後の課題

コーパスを用いた名詞述語文「AはBだ」の分析から、主語と述語の意味関係としては「性格づけ」がもっとも多く、次いで「同一づけ」「状態づけ」が多いことが明らかになった。また、「性格づけ」の中でも「種」と「性質づけ」が多くの割合を占めていることから、この用法が名詞述語文「AはBだ」の中心的な働きであると言えるだろう。

一方で、「状態づけ」や「文脈依存」も一定の割合で見られ、形容詞述語文や動詞述語文との連続性のなかで名詞述語文をとらえるという視点が必要であることも明らかになった。

しかし、主語・述語の意味関係にもとづいた詳細な分類については検討が必要な部分も残されている。「同一づけ」、「性質づけ」、「状態づけ」、「動作づけ」といった大きな分類においてはそれほど問題がないと思われるが、暫定的な定義にしたがって分類したのもあり、「体言締め」や「文脈依存」については再検討の余地は残されている。

また、名詞述語文「AがBだ」との比較は不可欠である。名詞述語文「AがBだ」と比較することによって、それぞれの名詞述語文の役割分担が明確になると思われる。

さらに、主語名詞から述語名詞までの距離を広げて検索をすることによって、それぞれの名詞述語文の主語と述語の距離の違いについての分析も可能となる。

今後の課題としたい。

〈注〉

- 1 今田 (2011) は主語の意味分類について述べたものであり、類型ごとの数値化は行っていない。
- 2 三上 (1953) は名詞述語文を準詞文としている。用例は以下の通りである。用例の番号は筆者。

指定 (第一準詞文)

- 1) イナゴハ害虫ダ。
- 2) 犬ハ動物ダ。

指定 (第二準詞文)

- 3) 幹事ハ私デス。
- 4) 昨日到着シタノハ扁理ダ。

端折り (第三準詞文)

- 5) 姉サンハ台所デス。

- 6) 明日カラ学校ダ。
- 3 三上 (1953) は「AはBだ」という包摂判断においては、概念の外延量は $A < B$ であるのが普通であり、同一判断 ($A=B$) は解説の名詞がたまたま唯一のものである場合であって、包摂判断であることに変わりはないと述べている。
 - 4 用例の番号、および下線は筆者。以下同様。
 - 5 丹羽 (2005) は19) のように要素が一つの帰属関係を同一関係の一種とみなしている。また、20) のように集合の要素が複数想定されるものについては包摂関係としている。帰属関係には同一と包摂の2種類があることになる。この点についてはすでに三上 (1953) が包摂関係の「スペシャルケース」として指摘していることである。
 - 6 「S」が文脈に依存しなくても (自立的に) 「A」と「B」の意味関係が理解されるものは性質文となる。「S」の文脈依存度によって「逸脱的」か否か (ウナギ文であるか否か) が判断される。その意味では、いわゆるウナギ文の延長線上に位置づけることには、問題がないと考えられる。
 - 7 指定文は、文の種類を指すものであり、高橋 (1984) は指定文という語は用いていない。ここでは述語名詞が主語名詞に該当する要素を示すものを指しており、なおかつ主語と述語の意味関係が、数値の提示、内容と枠組み、とらえなおし、意味説明という特徴的なグループとしてくれないものをすべてここに含めている。
 - 8 高橋 (1984) では「性格づけ」の中の「量・程度」に位置づけられるものである。
 - 9 高橋 (1984) の「存在」は「どこに」だが、「どの程度」も「存在」としていと考えれば「量・程度」と「存在」の連続性も考えられる。

〈参考文献〉

- 新屋映子 (1989) 「文末名詞」について」『国語学』159集 国語学会
- 市川保子 (1990) 「名詞述語文「～は～です」の意味と機能に関する一考察」『文藝言語研究. 言語篇』18 筑波大学文藝・言語学系
- 今田水穂 (2011) 「日本語名詞述語文の種類と主語の意味分類について - 京都大学テキストコーパスと分類語彙表を用いた調査・分析」『文藝言語研究. 言語篇』60 筑波大学文藝・言語学系
- 菊地康人 (1995) 「「は」構文の概観」『日本語の主題と取立て』くろしお出版
- 高橋太郎 (1984) 「名詞述語文における主語と述語の意味的な関係」『日本語学』3-12 明治書院
- 角田太作 (1996) 「体言締め文」『日本語文法の諸問題』鈴木泰・角田太作編 ひつじ書房
- 丹羽哲也 (2005) 「名詞述語文, 形容動詞述語文, ウナギ文」『日本語科学』18 国書刊行会
- 三上章 (1953) 『現代語法序説』刀江書院
- 南不二男 (1993) 『現代日本語文法の輪郭』大修館書店

Type and Relative Frequency of the Noun Predicate Sentences “*A wa B da*”

Yuichi Sato

Noun predicate sentences with the structure “*A wa B da*” can be classified into different types according to the relationship in meaning between the subject noun and the predicate noun.

The predicate noun generally indicates characteristics and properties of the subject noun. Sometimes it identifies the subject noun or describes the action of the subject noun.

When the Japanese corpus (BCCWJ: The Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese) was examined, the relative frequency of each type of noun predicate sentence became clear.

Among the noun predicate sentences “*A wa B da*”, 51% of predicate nouns indicate characteristics and properties of the subject noun, 26% of predicate nouns identify the subject noun, 15% of predicate nouns indicate the state of the subject noun, and 3% of predicate nouns describe the action of the subject noun.

This shows that the noun predicate sentence “*A wa B da*” turns to have links to the adjective predicate sentence and the verb predicate sentence.